

ワユワマ
-It's happy days-

祭りのあとで



!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!

この小説は「タユタマ -It's happy days-」のネタバレに近い記述を含みます。
ゲーム未クリア・未プレイの方は、これ以上の閲覧をお奨めいたしません。
ご注意ください。

!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!
!!!! CAUTION !!!!

「祭りのあとで」

故郷は遠くにありて思うものだと、昔の詩人は詠^よんだ。

要^{かなめ}三九郎が生まれたのは和歌山県で、子供時代は京都や大阪で過ごしてきたから、故郷は関西圏だと言つて差し支えない。その意味では彼の故郷は遠くにある。が、関西が懐かしいとか、戻りたいとかと思つたことは、二十八歳になる今まで一度もなかった。

「ガキン時のことなんぞほとんど憶えとらんし、ロクな思い出ないっちゅーねん。関西弁が抜けきらんだけやのに、メンバーの奴らと来たらどいつもこいつも、里帰りする言うたら俺が関西に帰るんやと思ひ込みくさつて……」

手荷物の中に紛れ込んでいた「愛すべきサンキューへ。大阪のおみやげ、ヨロシク！」だの「あたしは蓬莱の肉まんとたこむす！」だの「けし餅でOK」だのと書かれた付箋紙をくしゃつと握りつぶし、三九郎はJR中央線新宿駅の構内にあるゴミ箱へ投げ込んだ。

「……あ、しもた。あの手紙、保存しとけば来週、ブログのネタにできたんちゃうか」

数年前にメジャーデビューを果たし、ヒットチャートの上位に名前が踊ることも珍しくなくなった人気ロックバンド「Deus ex machina」。そのベーシスト兼作詞担当としてそれなりの人気を得ているのが今の三九郎だから、ついそんな気を回してしまう。

「いや、仕事の事は忘れんと。盆休みや、オフなんや、里帰りや。のんびりせんとな」

ゴミ箱に背を向け、三九郎は見慣れたオレンジ色の帯が塗装された電車に乗り込む。

下りの中央線。目指すのは、多摩地方のはずれにある韋原町。

忙しさにかまけて、すっかり足が遠退いていた。三九郎にとつては八年ぶりの帰省である。

「……あれから八年も経つとんのに、あんま変わつとらんな」

停留所でバスを降り、三九郎が呟いた最初の一言がそれだった。

「あ、いや、ちゃうわ。あいつは八年前、あんな堂々としとらんかったな」

掌で太陽を隠しつつ、空を見上げる。そこには、高度にして百メートル程度の低空を優雅に舞う巨大な鳥の姿があつた。彼の親友である泉戸裕理と、その妻となつたましろが苦勞して調伏せしめた三強と呼ばれる太転依、その一角に数えられる鳳凰だ。

さらに、手近の街路樹の方へ目を凝らせば、木陰で涼んでいる丸っこくて可愛らしい奇妙な生物を何匹も見つけられる。これら幼い太転依は大した力もなく、人間どころか野良犬や野良猫でさえ天敵になりうるはずだ。八年前は皆、特別な能力^{ちから}を何も持たない者には姿が見えないよう、隠身の術を使っていたはずなのに、今は警戒心を抱いている様子がまるでなかった。

「実際、現実離れしてもうたな、この町……。おとぎの国かいな」

数年前から如月財閥が音頭を取つて、教育機関やマスメディアを巻き込んだ一大キャンペーンを展開している。それが人間たちの意識を少しずつ変えていることに気付いたのだらう、各地に身を潜めていた太転依らが少しずつ人里に降りてきて日常化し、もはやニュースで取り上げられることもなくなつてきているが、それでもこの韋原町ほど太転依の棲息数が多い地は他にない。

「町ぐるみで太転依と共存しとるっちゅー話、ホンマなんやろな……」

一時は観光地として賑わつたらしい（八衢神社も丸儲けしたらしい）という話は、途切れ途切れながら連絡を取り続けている友人の河合アメリカから聞いてはいたが、直に目で見るとやはり違

った感慨があるものだ。

「はは、こらオモロイわ。見てるだけでも退屈せえへん」

屋根の上、用水路、空き地の草むら。そこらじゅうを走り回る太転依たちを眺めつつ、三九郎はアスファルトの道を踏みしめ、歩き出した。

が、葦原町の景色を面白がっていられたのは、ほんの数分の間だけだった。あまりの暑さに、全身から汗が噴き出してだらだらと流れ落ちてくる。

「いくら夏や言うても、何でこんなクソ暑いんや、殺す気かいな……」

だんだん、歩き続ける気が失せてくる。

父親のいる実家へまっすぐ帰るつもりでいたが、仕事で忙しい彼が三九郎の帰りを待っている道理はない。昨夜に「盆休みの間だけ、そっち帰るわ」と電話をした時も「そうか。鍵は郵便受けに入れておく」とだけ言って通話を切られてしまったほどだ。

「お互い、血イ繋がってるつちゅー義務感で父子の真似事しとるだけやしなア……」

八年前、創聖学院の卒業後は音楽で身を立てていくつもりだと話した時も「俺は反対だ」と言っただけで黙り込んで、一切取り合おうとしなかった。いくら休暇とは言え、そんな父の住む葦原町へ何故帰ってくる気になったのやら。

——いや、違う。

三九郎にとつての葦原町は「父が住む町」ではない。この町こそが自分の故郷、自分の原点なのだと感じている理由は、別のところにある。

「……あいつに会って、ちと話がしたいだけなんやけどな」

そんなことを考えながら、歩いていたせいだろうか。

道路脇にある、やたら高い塀と重厚な門構え。八年前なら何の感慨もなく通り過ぎていた日常の一部が、やたらと存在感を漂わせつつ視界に入ってきた。

創聖学院の正門である。

ほど近くにある小高い陵、その斜面を利用して建てられた学舎は、三九郎が通っていた頃と何も変わっていないように見える。いや、講義室あたりの窓枠に塗られたペンキの色が違うような気がする。経年劣化で錆が浮いた部分を補修するついでにイメージチェンジでもしたのだろう。

「ちと、涼んでいこか……」

その程度の軽い気持ちで、三九郎は門を潜った。

その彼を、創聖学院——というより、旧創聖女学院のシンボルである慈愛の聖母像が見下ろしてくる。その、高さ三メートルほどの石像を正面に据えた左手には、陵の中腹から頂上にかけて建てられた女子学部^{フコロレクス}の学舎へ向かうためのケーブルカー。右手には駐輪場と駐車場があり、その脇から伸びているゆるやかな坂道を上がっていけば一般学部^{スライトリ}の敷地内へ辿り着く。

その風情にえもいわれぬ懐かしさを感じる傍ら、部外者となつて久しい自分に対する「目に見えない壁」のようなものを感じる。軽い気持ちで入ってきて本当に良かったのか——。

「おや？　そこに居るのは……そうだ、要君だ、そうだそうだ、間違いない」

不意に声をかけられ、三九郎は背後を振り向く。正門の外に国産の白い高級車が停まっただけ、その運転席から降りてきたばかりらしい初老の紳士と、助手席にいた秘書然とした三十代半ばの女性がこちらに歩み寄ってくる。

二人とも顔に見覚えはあるが、さて誰だったのか。三九郎はどうにも思い出せない。

「いやあ、久しぶりだね。卒業後の君の活躍は娘からもたびたび聞いているよ。盆休みで帰って

きた、というところかな？」

紳士の親しげな振る舞いと「娘」という言葉を聞いて、三九郎はようやく思い出した。

「ああ、そうや、思い出した。アメリカとこの親父さんや。ガッコの理事やつとる……」

「いいえ、今は理事長です」

微笑みつつ、秘書の女性が訂正をする。

「あ、そうなんですか……失礼なこと言うてしもた。すみません」

「謝ることはありません。在学していなければ、知らなくて当然です」

秘書の言葉に、玄造も頷いてみせる。

「そもそも、君が在学していた頃から直接話をする機会はほとんどなかったしね。我が学院の卒業生として勝手に注目してただけだよ。君の華々しい活躍は実に誇らしいものだ」

「いや、華々しいって。そら言い過ぎですわ。俺らの曲、そこまでヒットしてませんよ」

「そうかしら？ 芸能界で生き残り、音楽だけで生活が成り立つ。それだけでも、大したものだと思うけれど」

秘書の女性までもが真顔でそんなことを言う。二人がかりで面と向かって持ち上げられては、面映ゆいことこの上ない。

「ほんと、止めて下さい。自分はこの兄ちゃんと変わらんですよ。この通り、顔出しっぱで歩いとつても誰も気付かへんし。声かけてくれたん、おっちゃ……理事長が初めてやのに」

「おっちゃん、で構わないよ。君にとつての私は、何よりもアメリカの父親だろう。私の方も、そう受けとめてもらつた方が気楽でいいな」

「……恐縮ですわ。ほな、遠慮無く」

「ところで、要君。学院には何の用で？ 恩師にでも会いに来たかね」

「恩師……いや、そんなつもりはないんですけど。ほんとにたまたま寄つただけです。ていうか、蘭ちゃんってまだ創聖学院におるんですか？」

「女子学部の方に移籍しているが、今は休暇中のはずだから……」

「そっか、そうですか。元気でやつとるんなら、それで充分です」

「うちの娘には、君が帰つて来たことを連絡しているのかね？」

「朝イチで携帯にメールしといたんやけど、返事まだ無いんですわ。珍しい話で」

「ああ、なるほどな。あの子は今日、仕事が休みなんだよ。先週末に多摩川上流へ現場の視察に出かけた時の代休を取つてるはずだ」

「？ ちゅーことは……」

「だからだと、昼過ぎの今まで寝ているんだろう。仕方ない娘だよ」

玄造が苦笑する。その物腰は、娘を気遣う優しい父親そのものだった。

自分の父親もこんな風なら良かったのにと一瞬思つたが、考えるだけ

「要君、もしこの後の予定がなければ、私と一緒に家に来るかね。娘は私が起こすから、一緒に食事でもしよう。何なら、酒の一杯くらい奢るよ」

「え、あ……いや、遠慮しますわ。悪いですよ、そんなん」

「いやいや、そう言わずに。……ええと、私の仕事はあと、何が残っていたかね？」

玄造がそう言うのと、背後に控えていた秘書が半歩前に出てきた。よほど仕事のできる女性なのだろう、三九郎と玄造が話している傍らで先の展開を読んですでに手帳を取り出して、玄造の眼前に今日一日のスケジュールを書き込んだページを差し出してみせる。

「今日は、このままお帰りになっても問題ありません。理事長の判断が必要な急ぎの要件もありますし、理事会への連絡は私が引き受けます」

「そうか……そうしてくれるかな。いつもすまないね」

「お気になさらず。お任せ下さい」

ここまで来ると、三九郎も誘いを断りづらかった。それに、葦原町に帰ると決めた時点で、アメリに会うことは目的の一つに数えてあるのだから。

「……じゃあ、遠慮無く。おっちゃんの心遣いに甘えさせてもらいます」

「よし、では決まりだな」

秘書の女性がケールカーの方に歩いて行くのを尻目に、三九郎と玄造は門の外に停まったままの車に乗り込む。クーラーで冷やされた車内の空気が気持ち良くて、それだけでも玄造の誘いに乗って良かったと思えた。汗がみるみるうちに引いていく。

「そういや、おっちゃん。あの秘書さんって誰でしたっけ。自分、見覚えあるんですけど、どうも思い出せんで」

走り出した車中、三九郎は運転席に座る玄造に一応訊いてみた。

「ああ、彼女は私の秘書ではないよ。それに近いことはしてくれているが……。ほら、多嘉山君だ。君が在学していた頃からフロアレスの理事をしているはずだが。憶えていないか？」

「へ？ ホンマですか？ あんな物腰柔らかい優しいような人やったっけ」

「はは、確かに昔は、融通の利かないところもあつたかな。だが今は、私が一番信頼を置いている部下だよ。……というか、彼女がサポートしてくれるお陰で、私は何とか理事長をやれていると言わべきだな」

「なるほど……。八年も経ったら、人間ってやつば変わるもんですね」

考えてみれば、玄造もそうだ。三九郎の記憶では日和見主義で頼りない中年男というイメージだったが、今、隣でハンドルを握っている彼は、頼りがいのある大人の男そのものに見える。

「そうだね、八年は長いよ。良かれ悪しかれ、変わらない方がおかしい……と言うと、うちの娘はおかしい、ということになりかねないか」

「あー。アメリカは変わりませんわ。あいつが変わるようなことあつたら天変地異の前触れですよ。……って、親御さんの前で言うことやないか」

「ははははっ、いや、要君の言うとおりでと思うよ」

二人して、笑ってしまう。

「いや、冗談はさておき。親の身量肩かもしれないが、何だかんだ言っとうちの娘はかなり変わっていると思うよ。年相応に落ち着きも出てきたしね」

「まあ、そうですね。ほとんど顔も合わせとらん俺にちよくちよく連絡寄越してくるんも、なんちゅーか、女らしい気の使い方やなあとは思ってました。こないだもツアーの途中で自分の誕生日すっかり忘れとつたのに、アメリカの奴はちゃっかり携帯におめでとうて送ってきてて」

「そうだね、ざつくばらんで遠慮がないのは相変わらずだが、気遣いは上手くなった」

「そうですね。お嬢さん、ほんとにええ娘やと思いますよ」

「その割に、ずっと独り身なのが父親としては気になるんだが……。そうそう、要君は？」

答える代わりに、三九郎は左手の薬指に嵌めた指輪を見せる。

「そ……そうか、残念……」

「残念って……何ですか、おっちゃん」

「い、いや、何でもない、何でもないよ。気にしないでくれたまえ」

もしや自分に気を使ってみせたのも、娘と仲の良さそうな男友達に探りを入れるためだったのだろうか。良かったら貰ってやってくれ、とでも言うつもりだったのか。そんなことを勘ぐってはみたが、さすがに訊くのは止めておいた。

けれど、アメリの年齢を考えればそれも当然だろう。いい女になっているというなら尚のこと、それだけ周囲の態度も変わってくるし、幸せになって欲しいとお節介を焼きもする。

「……ま、そら、こんだけ時間経ったら、いろいろ変わるわな」

三九郎は、窓外の景色に目を移す。

「あいつも、多少なりと、変わっとなのかな」

流れていく窓外の景色を見ながら、自分以外に聞こえない声で呟いた。

河合家の敷地隅にある駐車場へ車を入れ、三九郎と玄造は庭に出る。

「……相つ変わらず、広おて綺麗な庭やなア」

手入れの行き届いた植え込みや芝を見て、三九郎は思わず感嘆の声を漏らす。

「妻も私も、若い頃は苦労したからね。その反動みたいなものだよ、見栄の塊だ。アメリは未だに、こんな庭と無駄に広い家は売り払って丁度いいところに引越そう、とか言うんだが」

「確かにアメリのやつ、普段のカネ勘定はやらセコかった記憶がありますけど……。いざ遊びに行こうって決めた時は、思い切りよく浪費しとったくせに」

「あの子の感覚の根っこは、今も、小さな建て売り住宅に住んでいた子供の頃のままだだろうね。もう二十年近く昔の話だが、妻が建設会社の取締役を世襲する前は、当時教員だった私の給料だけで生活していたから」

「……ひょっとして、その建て売り住宅、八衢神社の近所ですか」

「その通りだよ。娘から聞いていたかね？」

「いえ、初耳ですわ。成る程、納得しましたわ……そういうことやってんな」

言いつつ、三九郎は庭の中央に構えられた大きな池に目をやる。そこには石碑のようなものがあって、何を書いてあるのだろうかとふと気になったのだが

「オレ様の寝床につき、不在の間も綺麗にしておくこと。ちよつとでも水が濁ってたら承知しねエぞ……って。何やねん、これ」

おおかた、神通力で庭石に刻み込んだのだろう。応龍が日本を離れて修行の旅に出たという話は三九郎も一応知っていたが、いつかはここに帰ってくるつもりなのか。

「石碑にしてまで、自分のツンデレぶりを記録しとかんでもええやろ、あいつも……」

呆れるのを通り越して、思わず笑ってしまう。

「あら？ お父さん、お帰りなさい。……そちらは、お客様？」

玄関先の方から声がして、振り向く。

「お……おお、アメリやんか。久しぶり、えらい雰囲気変わったなあ」

久しぶりに見るアメリの姿は、確かにずいぶんと変わっていた。ストレートのロングヘアに髪型を変えただけではなく、物腰まで楚々とした大人の女そのものである。

「……って、ちょ、ちよつと待てやアメリ。お前、そのお腹……」

どこからどう見ても、臨月を間近に控えた妊婦のそれである。

「違ふよ、要君。アメリではない、姉のサーラだ。出産準備で嫁ぎ先から帰ってきているんだよ。」

会うのは初めてかね？」

「あ、あれ？ お姉さんて……え、こんな似てはるんですか」

「本人はそんなに似ていないと思っているのだけれど……間違えられたのは久しぶりよ。アメリカのお友達？ いつも妹かお世話になつています」

来客に合わせて余所行きの態度を取っている風には感じられない。この姉は恐らく、本来の性格からして淑やかなのだろう。

「い、いえ、最近はそうお世話しとらんですけど……どうも、初めまして」

そう言えば、アメリカの母親は玄造を尻に敷く勝ち気なタイプだと、誰かに聞いたことがある。アメリカの性格は母親似、サーラは父親似といったところなのだろうか。

「サーラ、アメリカを連れてきてくれないか。どうせ寝ているんだろうが、要君が来たと伝えてくれれば、きつとすぐに起きてくるから」

玄造が言うと、サーラは苦笑しながら小首を傾げる。

「何言ってるんですか、お父さん。アメリカなら今頃、飛行機に乗って空の上です」

「……何だと？ 旅行か？ 誰と、何処へ、何をしに」

「ほら、海外にいる……そう、キサラギさん、だったかしら。招待されたとかで。子供の頃からお友達のゆみなちゃんと一緒です。先月末、喜んでバスポートを取りに言つたじゃないですか」

「な？ あの旅行、日取りは決まつてなかったはずだぞ。それに、私は許可した憶えはない」

「許可なんて……。あの子はどう大人なんですから、好きにやらせてあげればいいんです。お父さんは最近、あれこれ理屈をつけてアメリカを束縛したがるから……」

「なつ、何が束縛だ。女の子だけで海外旅行なんて、間違いがあつたらどうするんだ！」

「アメリカはもう、女の子、なんて言う歳じゃありません。間違いがあつても自分で責任を取れるんですから。お父さんがどうのこうの言う必要はないんです」

「操は止めなかったのか?！」

「お母さんがアメリカに奨めたんです。お父さんに黙って出発すればいいから、つて」

「ええい、操といいサーラといい、どうしてこうアメリカの肩ばかり持つんだ……!!」

取り乱す玄造、冷静にとつとつと話す姉。どう見ても前者の分が悪い。

考えてみれば、いくら学生時代に仲が良かったと言っても、今の三九郎はアメリカと距離を置いていたのである。そんな男友達を、出先でたまたま出会つただけでわざわざ家まで連れてくる玄造の行動自体、アメリカにとつては大きなお節介になリかねない。

玄造の行動が微に入り細に入りこんな感じだとすれば、それはアメリカも——いや、普通感覚を持つている妙齢の女性なら、反発心の一つや二つ抱いて当然だ。

「ちゅうか、アメリカもいろいろあんねんなあ……。親らしいことやってくれる親っちゅう人も、それはそれで面倒臭いもんなやな」

ひっそり呟いて苦笑しつつ、三九郎は頭を掻いて。

「……おっちゃん。とりあえず俺、帰りますわ」

「な？ あ、いや、何だね、急に」

「いや、急も何も。アメリカがおらんのやつたら、俺、ここにおつても邪魔なだけですやん」

「そ、そう……なるか、そうなつてしまうのかな。すまない、私が無理に誘つたばかりに……。ええい、アメリカもこんな時に、全く間の悪い」

「いやまあ、突然戻つて来た俺が悪いんやし。気にせんとつてください」

「本当にすまなかった、無駄足をさせてしまつて……。そうだ、車で近くまで送ろう」

「ええですよ、そんな氣遣いせんでも。親が住んでる家、ここからそんなに遠くないんで」

「いや、そんなことを言わずに。遠慮しなくていいから」

「遠慮とかやないです。ホンマに歩いて行ける距離なんで……」

「そう言わずに。送らせてくれたまえよ。ね、要君」

反射的に「おつちゃん、さすがにウザいですよ……」と言いかけたが、それはさすがに喉元で止めた。玄造からすれば善意なのだろうとわかるだけに、どうにも対応に困る。

「ごめんなさいね。うちのお父さん、いつもこんな感じで」

サーラが代わりに謝つてくれた。

「いつそ、タクシー代わりにしちゃつても構わないですよ。それでお父さんの氣も済むんだろうし。……アメリの他にも、会いたいお友達とかいらつしやらない？」

「いや、そつちは落ち着いてから、明日行こうかと思つてたんですわ。連絡も全然してへんし」

「あら、そんなに親しくないの？」

「男同士ですよ、用もないのに連絡なんて取らへんです。それにそいつ、最近携帯とか持つてないらしくて。電波が届かへん山ん中とかヨソの国とか、しょっちゅう行つとるから」

「……ひよつとして、それ、泉戸さんのところの裕理君？」

「あ、はい。そうですね。三日くらい前やつたかな、たまたまアメリからメールがあつて。裕理の奴が当分家におるらしいとか、俺と会いたがつとるつちゅー話を聞いて……。久しぶりにこの町に帰つてみよかと思うたきつかけが、実は、それやつたりするんですわ」

「あら、そうだったの。裕理君とずいぶん仲がいいのね」

「ま、八年前は、ですけど。アメリのお姉さんやつたら、当然アイツのこと知つとりますか」

「いいえ、あまり接点はないのだけれど。アメリがあれこれ勝手に喋つてくれるから」

「はは……」

「行つてくれれば良いんじゃない？ 突然行つても、裕理君なら歓迎してくれるわ、きつと」

「いやー、どうなんですかね。あいつもヨメさん居おる身の上やしなあ、突然だとさすがに……」

「ましる君なら、大丈夫だろう。裕理君よりも君のことを歓迎してくれるんじゃないか？」

玄造まで、背中を押すようなことを言う。

三九郎は暫し考えて、口を開く。

「……ほな、お願いします。八衢神社まで」

住宅地の真ん中、鬱蒼と茂る小さな森に埋もれるようにして在ある鳥居と社。境内の片隅に建てられた小さな家、神楽殿を改造して造つたバイク用のガレージ。

夕刻の光に包まれたその光景は、昔と何も変わつていなかった。

「はは……。八年前に戻つたみたいやな」

車を降り、玄造と共に玄関先へ向かう。インターホンのスイッチを押す。

返事は、ない。

「おや？ 留守かな」

訝つた玄造が、二度、三度とインターホンを押す。が、やはり返事がない。

「おかしいな……。要君、アメリは確かに、裕理君は在宅だと言つていたんだよな？」

「ええ、そのはずですけど。商店街に買い物とか行つたんやろか」

「ちよつと待つてくれ、電話してみる」

玄造が懷から携帯電話を取り出す。

「あ、いや、おつちゃん。裕理は携帯持つてへんし……」

「裕導君だよ。彼ならいつでも連絡がつく」

「ああ、裕理の親父さんか」

「ちよつと待つていてくれ、すぐ済むよ」

蝉時雨の響き渡る境内の中、玄造の携帯から漏れてくるコール音が幽かに響く。

そして、そのコール音は唐突に熄^やむ。

「もしもし？ 裕導君かね？ 私だよ。今、君の家に来ているんだが……は？ あ、いや、そうではなくて、ちよつと訊きたいことがあるんだが。裕理君は……はい？ え、そんな……あ、いやいや、だから私は……こ、こら、無茶を言わないでくれ。いや、確かに夜の予定は特にないが……あ、お、おい、裕導君！ 裕導君、待つてくれ、もしもし、もしもし！」

玄造は耳元から携帯を離し、いささか困ったような顔で三九郎の方を向く。

「どうかしたんですか？」

「いや、近くの居酒屋に居るから、今すぐ来いと……」

「カンペキ親父さんとおつちゃんの私用やないですか。裕理の件は？」

「一応聞けたが……すれ違いだったらしい。今日の朝から仲良く温泉旅行に出かけたそうだし」

「はい？」

「あの二人、この季節になると毎年、結婚式を挙げた旅館に行くらしくてな。二泊三日で、明後日には返る予定らしい。それで、ゆみな君も息子夫婦も居ないからつまらんと、裕導君は昼間から飲んだくれてるらしくて」

「うわ、なんちゅー間の悪い……」

「でも、明後日の朝には帰つてくるそうだよ」

「その頃には、俺も都心に戻つてますねん。有り難いことに仕事がギッシリで」

「そ、そうか……。なら、次の休暇は？」

「とーぶんそんな予定ありませんわ。半年先までスケジュールぎつしりやし、裕理もあれで忙しい身の上ですやん。お互いに休暇がカブる可能性なんぞ、何パーセントやつちゅう話で」

溜息を吐きつつ、腕を組む。

「ま、しゃあないわ。約束したわけでなし、こんなもんですわな」

目を伏せたまま、唇を噛む。そして、躊躇いがちに次の言葉を紡ぐ。

「……最近、ちと、悩んでましてね」

「？ 三九郎君が、かね」

「仕事は順調やし、バンドの面子とも仲はええ。同棲しとるツレともそこそこ上手いことやつとる。けど、何か息苦しいんですわ。理由はようわかれへんねんけど」

「ほう……？」

「裕理と会って話したら、何か見えてくるんちゃうかと思うてたんですけど。あいつ、たまに良いこと言iyorんですわ。ダテに神社の息子やつとらんつちゅーか」

「……………」

「おつちゃんも知つとるかもしれへんけど、俺、創聖学院入ったばつかの頃。かなり荒れてましてん。母親は自分勝手に逃げてしまいよつて、父親は親らしいこと何もせえへん。関西から引つ

越する時も相談一つなしに無理矢理ですよ。音楽やりはじめたんも、ジャカジャカ楽器鳴らして大声で叫んどつたらちーと気が晴れるって、ただそんだけのことで」

「そう……なのか。今の君からは、想像もつかないが……」

「つか、創聖学院に入ったのも、親への嫌がらせやったなあ。ほら、創聖の学費、けつこう高いやないですか。そのくせ勉強せんでドラドラしとつたらすぐ留年やし。そもそもドラけてましたよ、成績不良で強制退学させられるまで、親に無駄な学費払わせ続けたらうと思うて。……その頃に、裕理の奴と会ったんですね」

苦笑しつつ、頭を掻きつつ。三九郎の細い眼が、笑しげに笑う。

「忘れもしせんわ、ガツコの駐輪場で。通学に使った俺の愛車^{エ「ラブ」}がうんともすんとも言わんようになつて。ムカついたんでメチャメチャ蹴り飛ばしとつたんですよ。ホンマにぶつ壊したろうと思うてた。そしたら、裕理の奴が飛んできて、俺のバイクを庇いよるんです。いやもう、俺、それ見てなおのことムカつきましてん。俺なんぞ誰にも庇うてもろてへんのに、お前はこのクソポンコツを庇いくさるんか、つちゅー感じで。そもそも、あばらの二、三本持っていく気でバイクごと裕理を蹴り倒したんですけどね、あいつときたら痛いとも何とも言わずに、俺を睨み返して言うんですね。僕が直すから、走れるようになったらそれでいいだろ、って」

「は……はは、裕理君らしいと言えば、らしい……」

「直せるもんかいと思うてたんやけど、あいつ、手も顔も油塗れにして、その場でほんとに直しよつたんですわ。最低限、エンジンかかるとこまで持っていっただけですけど。……そんな時、あいつ、何て言うたと思います？ 機械はいつだって自分にできる精一杯で持ち主に応えようとしてるんだ、動かないのは動けない原因があるだけだ。何に腹立ててるのか知らないけど、メンテされなくても、オイルがドロドロでも、こいつは寿命すり減らして必死で君に応えようとしてる。そんな奴に当たり散らすのだけはやめてくれ、何なら僕が定期的に面倒見るから、って」

「……………」

「最初は、アホかこいつと思うてましたよ。タダでメンテしてくれるんなら利用したれ、くらいの気持ちしか持つてへんかった。けど、あいつが直したバイク、ホンマに調子よくて。ひよつとしたこのバイク、ホンマに必死で俺に応えようとしとるんやろか……とか思い始めたら、何や愛着湧いてきましたん。そんな奴に当たり散らしてた俺が、何や最低の男みたいに思えてきて」

「……それが、君の更正するきつかけだった、のかな」

「きつかけどころか。あれがなかったら、鬱憤の捌け口でしかなかった音楽への取り組み方も変わってません。今のバンドの面子も、俺に声かけてくれることはなかったやろな。裕理が居らなんだら、今の自分はありませんわ。……ま、本人には絶対、こんなこつ恥ずかしいこと言うたりしませんけどね。ここだけの話つちゅーことにしといて下さい」

腰に手を当て、三九郎は空を仰ぐ。

「お互い、八年の間一度も会わずにやってきたとるんやし。今更昔のことを引っ張り出してきて、恩に着とるだの、会いたいだの、話がしたいだの言うたところで、裕理にしちゃ迷惑やろ。お互い、そんだけ違う時間を歩いてきたんやから。……黙って帰りますわ」

梢の向こうに、相も変わらず、鳳凰が飛んでいた。

玄造も空を見上げて、それを見つめて――。

「……祈ってみたら、どうかね」

「は？」

「いや、裕理君に会えるように。ここは神社なのだから」

「はは、何ですかそれ。そんなすぐにご利益くれるような神様、聞いたことありませんわ」

「ものは試しという奴だよ。最近、この葦原町が何と呼ばれているか、知っているかね？」

玄造が、にやつと笑う。

「誰もが幸せになれる町、だ。君にも奇跡の一つや二つ起きるかもしれない。嘘だと思うなら、試してみればいい」

「試せも何も、そんなん……」

言い返そうとした時、玄造の携帯が急に鳴り始めた。

「やれやれ、裕導君の催促だよ。困ったものだ。ちよつと行ってくる」

「へ？ あ、俺、帰りの足が……」

「顔を出してくるだけだ、すぐに戻るから待っていてくれ。なかなか無視はできないんだよ、あれでも私の友達なのでね」

車を置いたまま、玄造が鳥居の外へと駆け出していく。

境内には、三九郎だけが残された。

「……やれやれやな」

家まで歩いて帰れなくてもいいし、今ならまだ、葦原町内を走るバスもある。けれど。

「ま、期待はしてへんけど……」

神社の本殿へ、歩み寄る。

賽銭箱に五円玉を放り込み、鈴を鳴らす。以前親友から教わった通り、二礼二拍手一揖。

「縁があつたら、また、抜けた顔した友達に会えますように」

願を、かけてみる。

「……つて、これで裕理が戻ってくるんやったら、世話ないわ」

苦笑して、本殿に背を向ける。

すると。

「……………」

目の前に、裕理がいる。

「錯覚……やろ」

手の甲で目を擦り、首を振って。

もう一度、目の前に向き直る。

「……………」

何をどう見ても、裕理が、そこに、居る。

八年前と何一つ変わらない姿で、三九郎の前に立っている。

呆然とする三九郎に、裕理が微笑んでみせて。

「はは……ほんとに三九だ。久しぶり、変わってないな」

それはこっちの台詞や、と言い返したかったが、声にならなかった。

「……おかしいと思わなかった？ ゆみなちゃんが日本を離れてるのに、鳳凰がここに居てさ」
夕闇が漂う境内の中、八年前と同じくガレージの中で。ビールの缶を片手にした裕理が言う。
「何年前だっけな、ゆみなちゃんをお願いしたんだよ。自分を守ってくれるのは嬉しいけど、鳳

鳳さんの恩返しを自分一人で使い切るのは勿体ないって。それで……」

「出来る限りでいいから、人間でも太転依でも、困ったヤツがおったら助けてやってくれ、とか何とか言うた訳か？ 相変わらず優しい子やのお……」

答えた三九郎は、ガレージの床面へ直に腰を下ろしている。つまみ代わりの沢庵を囓りつつ、テールル代わりにした工具箱にぐい呑みを置き、そこに裕導秘蔵の地酒を注いでいく。

「そうそう。自分だけ守られてるのって勿体ないって思ったらしいんだけどさ。鳳凰がいつまでその恩返しを続ける気かわかんないけど、今度みたいに僕まで知らせてくれたりとか、気が向いたら時々やってくれるんだよ」

「ほな、いきなり旅先から帰って来たのも、鳳凰の術なんか？」

「いや、それは自分で。鳳凰が空に神気の道を造ってくれたから、簡単に跳躍してこれた」

「跳躍？」

「テレポーテーションみたいなもん。いろいろ条件が整わないと使えないんだけどさ」

「……自分、昔からホンマに常識が通用せんヤツやったが、そこまでかいな……」

「それは三九も同じだろ？ まさかメジャーでやっていけるなんて思ってたかったよ」

「ンなもん、努力と根性があつたらどうとでもなるっちゅうねん」

「そりや僕の台詞だ。やろうと思つたら、三九でも神通力は使えるんだぞ？」

「アホぬかせ、一生かかっても俺には無理やっちゅうねん」

「僕だって、千年かかっても三九ほどベース弾けるようになる自信はないね。……あ、ベースで思い出した。こないだステージで転んだ時のケガ、もうすっかり直つたのか？」

「おお、単なる捻挫やし、今は全然……って、お前、あん時のライブに来てたんか？」

「いや、千里眼。術の練習がてら、たまーに三九の様子を見てたんだ。気付かなかった？」

「気付くかいなそんなもん！ ホンマどこまで人間離れしとんねんな、お前！」

「いや、だから。離れてないから。三九も同じこと出来るってば」

「うっさいわいドアホ、ほなお前も今からベース弾いてみいや」

二人して、笑い合つて。

「……ホンマに、八年前に戻つたみたいや」

ガレージの中を見渡しつつ、三九郎が感慨深げに呟く。

「僕にとつちや、半世紀くらい巻き戻つてる感覚だけどね」

「何や、また大袈裟な」

「いや、大袈裟じゃなくて……ま、いいや。説明するの大変だし」

「？」

「ところでさ。何でもまた急に、僕のところを訪ねてきたんだ？」

「いや、別にええやんか、そんなん。元ツレの顔見て酒飲みたかったって、そんだけや」

「元、って何だよ。今は友達じゃないみたいなこと言うなよ」

「八年も会わとらんで、ツレ扱いもないやろ、フツ」

「いやいや。うちの親父も以前似たようなこと言ってたけど、そういうのに八年も千年もないと思うよ。友達は友達だろ、何年経つてもさ」

「……………」

「あ、あれ？ 何だよ、何でもそこで黙るんだよ」

「いや、その……何でもないわ。相変わらず、たまにええこと言うわと思うてな」

「何だよ、それ」

「うるさいわい。ええから飲め。もうカラやろ、そのビール」

「んじゃ、そっちの日本酒くれよ。ぐい呑みは三九のでいいから」

「勝手に飲めや、空いたら注ぐ」

「ん」

ぐい呑みをひよいと手に取り、なみなみと注がれた酒に裕理が口をつける。

「……なあ、裕理。ちと訊いてもええか」

「何だよ、改まって」

「お前、たまに考えたりせえへんか？ 自分、何でこんなことやってんやろな、って」

「あー、しょっちゅうだよ。ぶっちゃけ今もそう思ってた」

「今？ なんでや」

「ほんとだったら今頃、ましろと温泉浸かってゆったりしてたはずなのに、とか」

「……邪魔して悪かったな、今すぐ帰るわ」

「あーごめん、冗談、冗談だってば。大丈夫、積もる話もあるだろうから一人で行ってこいって、そう言ったのはましろなんだから」

「ほー、デキたヨメさんやな、相変わらず」

「まあね、亭主の教育が行き届いてるから」

「アホ。教育されとんのお前の方やろが」

「はい、その通りです。ごめんなさい」

「ははは」

笑い合いつつ、裕理が酒を呷り、空になったぐい呑みを置く。

そこに、三九郎が酒を注ぐようとして。

「……何か、悩んでるんだ。三九」

急に真面目な顔で言われ、手が止まる。

「いや……悩んでるのかどうなのかすら、ようわかってへんねんけどな」

「あー、なんか逆にそういうの方がタチ悪そうだね」

「そうか？ ……いや、確かにそうかもしれないな」

「そういう時は、気心知れたヤツと酒でも飲んでさ。朝が来るまでバカ話とかしてさ。んなことしてるうちに、気がついたら解決してる気になってさ。それでいいんじゃない？ ……あ、それで今、こんな感じになってる訳か」

「まあ、そうやな。そういうことになるんやろな」

「で、どう？ 今、こんな感じで一緒に飲つてて、解決しそう？」

「……………」

暫時、考える。

創聖学院を卒業し、ひたすら音楽に打ち込んできた。そこそこ成功もした。長い人生を共にする伴侶も得た。順風満帆だと言つていいだろうし、他人はそう評価してくれるだろう。

けれど、そんな自分をふと見つめ直した時、不安に駆られてしまう。今の自分の姿は昔の自分が望んだ姿と完全にイコールではない。手を抜いて楽をしたこともある。妥協もした。本当なら自分の力で解決しなければならなかったことを、仲間たちの力で何とか切り抜けたこともある。バンドの評価は高くても、それは自分の力量と決してイコールでは繋がらない。自分は甘えてい

るのではないか、ただ少しばかり運が良かったただけで糊口を凌いでいるだけではないか――。

「……なあ、三九」

黙り込んでいる三九郎に、裕理がぐい呑みを差し出す。
空だったそこには、なみなみと酒が注がれている。

「一緒にツルんでたころ、楽しかったよな」

「？ お、おう。楽しかったわ」

「それから後は、どうだった？ 楽しかった？ 楽しくなかった？」

「いや、そりゃ、お前……」

口元に手を当て、細い眼を閉じて。

「……楽しかったで。ホンマに。お前にも分けてやりたいくらいや」

「そっか、そりゃ良かった」

「おう」

裕理の手から、ぐい呑みを受け取る。

笑顔で。

「じゃ、これからも多分、楽しいな」

「当然やろ。めっちゃめっちゃ楽しいで」

笑い合う。

もう、悩んでいたことなど、どうでも良くなっていた。

「……うおーい息子よ、帰ったぞー!! おるのかー!!」

急に、泉戸家の玄関側から声が聞こえてくる。

「裕理君、要君、いっしょに飲らんかね。大勢の方が楽しいぞー!」

玄造まで、すっかり出来上がっているらしい。

「やれやれ、しょーがない親父どもだな……。どうする、三九」

「ええんちやうか？ 親父さんらにオゴつてもろたら、もつとええ酒飲めるで、多分」

「そりゃいいな。何ならましろも呼ぼうか？ アメリもゆみなちゃんも美冬さんも、鳳凰も応龍

も鶴も、僕が今すぐ無理矢理連れてくるよ。で、みんなでパーッと」

「多嘉山理事と蘭ちゃんも連れてこれんで、あの二人、まだこの町におるらしいわ」

「はは、もう誰でも来いつて感じだな」

「ま、たまにはええやろ、そういうのも」

裕理から受け取ったぐい呑みの酒を一息で飲み干し、三九郎が立ち上がる。

「……なあ、裕理。次はいつ会える？ 今のうちに約束しとこうや」

「ん、と……そうだな、僕も結構忙しいしな。五百年後とかになるかもよ？」

「おいおい、無茶ぬかせ。俺とうに死んだるつちゅーねん」

「大丈夫だって、いけるいける。三九もそれくらい生きられるつて」

「そういうアホな話は、お前が俺くらいベース弾けるようになってから言え、タコスケ」

二人の笑い声が、八衢神社の境内に響き渡る。

いつまでも。――いつまでも。